

序章



わたしの名はクロウ。

まだ赤ん坊^{あか}だったわたしを、だれかが古い小舟に乗せて、海へと流した。

わたしはちっちゃな島に流れ着いた。潮^{しほ}に流された種のように。

わたしを見つけ、連れ帰ってくれたのはオツシユ。地に根を張り^は、太陽と雨の恵み^{めぐ}で育つことをわたしに教え、花が咲く^さとはどういうことなのかをわからせてくれた人。

わたしたちがめぐりあつた島は、小さくても頑丈^{がんじょう}だった。黒い岩が大きく積み重なつて島を

ささえ、その岩場^{いわば}に守られて、わたしたちの家——難破船^{なんぱせん}の木切れを寄せ集^{あつ}めてつくつたボロ家

——は大地と海の泥^{どろ}の上^{うへ}にたつていた。家といつしよに、小さな庭と、歩いて行けないところへ行くための小さなボートもあつた。

わたしたちはほかに何もいらなかつた。初めのうちは。

潮^{しほ}が引くと、となりの島、カティハンク島へ、藻^もや小魚^{こぎょ}がばらまかれたような浅瀬^{あさせ}を歩いてかんたんにわたることができた。

潮^{しほ}が満ちると、家のすぐそばまで海が来て、まるで家が船になつたような気がした。

長い間、わたしは、海の水位^{みづゐ}が上がり、わたしたちがほかからへだてられ、二人だけになるときが一番うれしかった。決めるべきことは何でも、わたしたち二人だけで決められる。

ところが、十二歳^{さい}のときのある晩^{ばん}、わたしはペニキース島で火が燃^もえているのを見た。だれも行くことのない島。そして、自分で決めたのだつた。わたしがどこから来て、なぜ流されたのか、突^つきとめるときが来たのだと。

けれども、それが何を危険^{きけん}にさらすことになるのか、それを失いそうになるまでわからなかつた。

1章



わたしがいつ生まれたのか、けっしてわからない。正確には。

ある朝オツシュが見つけたわたしは、生まれてわずか数時間後の赤ん坊だった。けれども、オツシュはカレンダーを持っていなかつたし、その日が何月何日なのか気にしなかつた。それで、わたしたちはいつも、真夏のそれらしい日を、わたしの誕生日ということにした。

わたしのまわりで起きた、ほかの大きなできごとと同じ。カレンダーにはまったく関係ない。たとえば、猫のマウスがうちのドアの前に現れた日。ひげが少ない顔で、そこが自分のうちだと決めつけていた。わたしが思っていたのと同じように。

そして、初めてオツシュがわたしにボートのかじをとらせた日もそう。オツシュはへさきのほうにすわり、気持ちよさそうに、顔に陽の光を受け、マストに寄りかかりながら、細かなしぶきがつくる虹の中にいた。それから、引き潮でカマイルカがうちの岸に取り残された日もそうだ。オツシュの留守中、わたしはちようどカティハンク島から帰ってきたところで、カマイルカもがいているのを見つけた。赤ん坊のような鳴き声をあげて、おびえていた。まず、わたしは、素

手でカマイルカがはまっているぬれた砂を大急ぎですくいのけた。そして、三日月形の尾びれをつかんで、少しずつ引きずって、ついにイルカが浮かべるだけ水のあるところにたどりつき、いっしょに海の中へすべりこんだ。

カマイルカはわたしの目を見つめて、去って行った。まるで、そのときのわたしをおぼえておこうとするように。まるで、わたしもおぼえておくべきだと言うように。その後、何が起きようとも。

こうしたできごとが起きたが、どの日もカレンダーとは関係がなかつた。

それでも、わたしは、この小さな島に住むようになって八年になるころ、自分の名前について知りたくてたまらなくなつた。夢からさめたら、急に自分の名が気になつたのだ。夢に現れたのは満天の星、潮を吹くクジラたち、そして海の詩。わたしは目を開き、しばらく横になつたままオツシュを見ていた。オツシュはコンロの前に立ち、使い古したなべでオートミールのおかゆを作っていた。

わたしは体を起こしてすわり、眠気をさまそうと目をこすりながら聞いた。「わたしの名前は、なんでクロウなの？」

オッシュュがオートミールをかきまわすと、スプーンは砂浜すなはまを引っぱられていくボートのような音をたてた。「前に教えただろう。おまえはここに流れ着いたとき、声からして泣いていた。ずっとカーカー泣いていたから、カラスという意味のクロウと呼ぶことにした」

今までずっと、その答えでじゅうぶんだった。でも、すべての説明にはなっていない。わたしは、すべてを知りたいと思うようになっていた。

「クロウって英語で？」わたしは聞いた。

オッシュュはときどき、わたしの知らない言葉で話した。音楽のような声。祈いのっているときはとくにそうだったけれど、島や海の絵を描かいているとき、口にすることもあった。初めてその言葉のことを聞いてみたら、オッシュュは、島に来る前のくらしから残している数少ないものの一つだと答えた。わたしに会う前のことだ。

その言葉を話すことはめつたになかったけれど、その言葉のくせがあるため、オッシュュの英語はほかの人とはちがって聞こえた。ミス・マギーは、それをなまりと呼んだ。けれどもわたしは、なまりがあるのはほかのみんなのほうかもしれないと思った。

「いや、最初は英語じゃなかった。だが、この人たちは英語を話す。だから、英語でカラスという意味のクロウにした」

わたしは立ち上がって体を伸ばし、体じゅうから夜を追い出した。わたしの両腕りょううでは、薄明うすあか

い朝の光の中で、翼つばさのようにはまったく見えない。

けれども、踏み台ふみだいに上がり、鏡——ちょうど顔だけ映る大きさ——を見ると、わたしの鼻すじはカラスに似にていた。生まれつきあるほおのあざは小さな羽根かみのような形。髪はほかのだれより黒いし、目も黒い。肌の色は、半年陽ひを浴びつづけた後のオッシュュみたい。

自分の細い脚あしを見おろした。がりがりの脚。

カーカー泣いていたからだけでなく、クロウと呼ばれる理由はほかにいくらでもあった。

オッシュュのほうは、三つ名前があった。ダニエル。これはミス・マギーの呼び方。画家。夏のバカンスにやってくる人たちの呼び方。そしてオッシュュ。わたしの呼び方で、言葉を話せるようになってからずっとそう呼んでいる。

ほんとうの名前はすごく複雑ふくざつで、小さな子どもが言うのは難むずかしかった。わたしは「オッシュュ」と言うのが精せい一杯いっぱいだった。それからずっと、オッシュュと呼んでいる。

「わたしのほんとうの名前がわかったらいいのに」わたしは言った。

オッシュュはじつとだまり、しばらくたつてから、やっと言った。「ほんとうって、どういう意味だ？」

「わたしのほんとうの名前。両親がつけてくれた名前」

オッシュュはまたしばらくだまってしまった。そして言った。「おまえはここに来たとき、生ま